

# 私立大学研究ブランディング事業

## 令和元年度の進捗状況

学校法人番号	331008	学校法人名	順正学園		
大学名	吉備国際大学				
事業名	エコ農業ブランディングによる発展的地域創成モデルの形成				
申請タイプ	タイプA	支援期間	3年	収容定員	2414人
参画組織	農学部、アニメーション文化学部、地域創成農学研究科、植物クリニックセンター				
事業概要	吉備国際大学は「地域創成に実践的に役立つ人材を養成する大学」として、地域創成農学部で六次産業化を総合的に研究・教育することを謳っている。この知見と実績を生かし、地方農村を対象に、高付加価値・低資源投入型農(漁)業や里山管理、農業ブランドの創出による「エコ農業ブランディングによる発展的地域創成モデル」を形成する。本事業の成果がモデルとなって、広く全国の農村社会の再生・創成に発展的に貢献することが期待される。				
①事業目的	<p>①これまでの経緯と事業の目的</p> <p>本学は、地元の強い要望を受け、平成2年の開学以来、現在までに、岡山県高梁市(本部・高梁キャンパス)に4学部、岡山市(岡山キャンパス)に1学部、および兵庫県南あわじ市では、(志知キャンパス)に「地域創成農学部」が設置されている。これらの立地拠点の中でも、特に高梁市および南あわじ市では、人口減少による過疎高齢化が顕著に進行し、経済の停滞、産業の担い手不足、といった、地方都市・地方農村社会に共通する課題を抱えている。本学では、これらの課題に対し、各専門分野の特徴を活かしたさまざまな取り組みを行ってきた。平成25年には、COC事業「だれもが役割のある活いきした地域の創成」が採択され、両市のキャンパスで、地域創成に向けた多面的な取り組みを行った。地域創成農学部は、「地方農村社会の再生・創成」を目的として開設された学部であり、COC事業では、南あわじ市を対象とした、将来人口の予測、固有作物栽培の現状分析と商品化、獣害調査とジビエ食品の試作などの研究成果をあげた。本事業では、これまでの研究実績を集約し、さらに発展させるために、地域創成農学部を中核とし、南あわじ市において「エコ農業ブランディングによる発展的地域創成モデルの形成」を目指す。事業を通じて、地域を再生するための教育・研究を実践するとともに、学生と地域との協働で「大学エコ村」創りを試みる。この事業に関わることで、全国からの入学生が、出身地を含む各地で農村社会の再生・創成に発展的に貢献できる実践力を身につけることが期待される。</p> <p>②大学の将来ビジョン</p> <p>本学は「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」ことを建学の理念としている。本学の将来ビジョンを、「地域創成に実践的に役立つ人材を養成する大学」と設定し、事業を通じて、地方都市の課題に関わるこれまでの取り組みをさらに発展させ、建学の理念を具現化する。</p>				
②令和元年度の実施目標及び実施計画	<p>(実施目標)</p> <p>【研究活動】</p> <p>計画に沿って研究活動を行う。研究実施には前年度の自己評価・外部評価の結果を受け、問題点があれば計画を変更する。研究者間の連携を密にする⇒研究計画の妥当性、目標の達成度、研究実施体制などについて自己評価と外部評価を実施する。</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <p>平成29年～平成30年のブランディング戦略による大学の認知度とイメージの向上効果について分析し、戦略を再検討する。⇒認知度・イメージ中間調査、中間報告書の作成、HP・ブログアクセス数、OC・公開講座参加者数、参加者アンケートを指標として自己評価・外部評価を実施する。</p> <p>(実施計画)</p> <p>【研究活動】</p> <p>①農業従事者の人口規模/構造の将来推計、農業経営上の問題点分析⇒農業従事者の人口規模/構造の推進値算出、農業経営上問題点とりまとめ②圃場・養液土耕栽培植物工場におけるBS処理濃度の効果の解析、別の溜池へのBS処理⇒作物の生長に及ぼすBS処理濃度効果及びBS処理後の溜池の水質確認③診断依頼の受付と病害調査⇒病原菌の同定・診断・採集および病害情報発信④クルマエビの成長に及ぼすBS処理濃度の調査⇒クルマエビの成長に及ぼすBSの最適濃度の確認(1年目)⑤里山基地の管理形態および生物相の解明と対照地(管理放棄された二次林)との比較⇒発生するバイオマスの種類と量の確認と生物相リストの作成⑥獣害対策効果の検証(協力農家:1年目)と忌避植物を用いた創作料理の試作⇒定点カメラによるモニタリングと効果の検証、忌避植物の創作料理作品の制作⑦化粧品の試作⇒石けん、ローション、消毒液の試作完成⑧廃菌床による病害防除の圃場検定(1年目)⇒レタスピッグペイン病に対する防除効果とレタス生育に及ぼす影響の検証⑨有機肥料を用いた試験栽培(1年目)⇒最適化された有機肥料を用いて野菜やナルトオレンジの栽培実施と病気の発生率や収穫物の品質に関する慣行法との比較⑩スパイス、タマネギ、ジビエを用いたカレーの試作⇒味覚試験でカレーの最適レシピ複数完成⑪余剰原材料の果汁を用いたジェラートやマフィンなどのレシピ開発⇒食品成分分析にて主食類、副菜類、飲料、菓子類のレシピの完成⑫分離酵母菌を用いた発酵食品の試作⇒分離酵母菌を用いたパン・酒類などの試作品の制作・開発</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <p>イベントのスポンサー、アニメCMの放送やインターネット広告を行う。HP更新、SNS・ブログの充実のほか、公開講座やOC、学祭、リーフレット等で、取組内容と経過を紹介する。報告書やシンポジウム形式で中間報告を行う。⇒目標達成度や実施体制などに関する自己点検・外部評価を実施する。</p>				

<p>③令和元年度の事業成果</p>	<p>本事業で設定した12の研究課題は、令和元年度も計画通り、順調に進捗し、地域(南あわじ市)創成につながる多くの成果を得た。課題ごとの主要成果は以下の通りである。まず、課題1では、南あわじ市の農業実態を集落レベル世帯レベルで調査し、集落営農がある集落の方が人・農地プランの策定確率が高いこと、および「集落営農がある集落は、その延長線上として人・農地プランを策定することができる。」ことを確認し、課題2では、バイオスティミラント“ルオール”の利用により痩せた土壌が肥沃になり、作物の縦・横方向の成長が著しく促進されること、“ルオール”を用いれば低農業・低肥料農業が可能になることを明らかにした。ついで、課題3では、病原菌の特定遺伝子の変異に基づく病害診断、さらに、病害防除・予防法の開発などが進み、課題4では、“ルオール”を利用した画期的クルマエビ養殖技術の開発に目処を付けた。課題5では、淡路島における近年の養生の変化を明らかにし、課題6では、エゴマとヒカマが獣害対策用の忌避作物となる可能のあることを示した。課題7では、農業を含まないタマネギ外皮を用いて、プロトカテク酸、ケルセチン、ケルセチン配糖体の混合物を工業的生産レベルで抽出して、その抽出物中のケルセチンとケルセチン配糖体の含有量が乾物重あたり15%以上であることを見出し、これが化粧品原料になることを示し、課題8では、シタケの廃菌床がレタスピッグペイン病の防除に、フナハリタケ由来の揮発性物質が赤かび病菌の成長抑制とマイコトキシン(カビ毒)の生産抑制にそれぞれ効果があることを見出し、課題9では、竹パウダーの作成ならびに竹パウダー投与がもたらす作物生育阻害や土壌微生物への影響についてデータを得るなど、資源の再利用に関する研究が進んだ。課題10では、捕獲される自然獣の体重は個体間差異が大きく、食用に適した柔らかい肉質を実現するためには、捕獲個体別に適切な熟成期間を設ける必要のあることを見出した。また、課題11では、「淡路島なるとオレンジ」の苗木を目標通り、100本生産して実需者に配布するとともに、「淡路島なるとオレンジアイス」の製品化と販売に成功し、課題12では、ブドウ品種「紫苑」から単離した酵母を用い、企業の協力を得てワインを製造した。本事業の最終(5年目)目標は、上記12課題における成果をもとに、南あわじ市において発展的地域創成モデルを構築することである。そのためにも、これら課題については次年度以降も取り組む予定である。</p>
<p>④令和元年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価)自己点検・評価は、本学自己点検・評価委員会において、研究、ブランディング活動および事業全体に分けて実施している。ブランディング事業に関しては、総合評価、戦略評価と研究課題について研究の進捗状況、研究成果の経済性・普及性・波及性・発展可能性、研究成果の優秀性、総合評価の項目について評価を行い、それぞれ評点を「非常に高い成果」、「高い成果」、「やや高い成果」、「やや低い成果」、「低い成果」(いずれも5段階評価の4(高い成果)に相当)とした。評価根拠は、以下のとおりである。【総合評価】計画策定、実施プロセス、成果、広報など多くの点で概ね良好である。実現可能性を見据えた現実的な計画策定。3年間の期間に、プロセス管理が適正に行われ、必要な計画の見直しをしつつ、目標の多くが想定通りまたはそれ以上の成果を達成している。【戦略評価】大学ブランド商品の開発や新たなマーケティング戦略による販売促進等、発展的地域創成に資する取り組み成果として高く評価できる。また、本研究は農学部・アニメーション文化学部を中心に全学を挙げて取り組んだものであり、本学のブランディングマークやブランド商品用ロゴの商標登録も認可された。さらに事業のイメージキャラクターを用いた3Dキャラクターのバーチャル教員を誕生させた事により、各メディア(TVニュース、新聞、ネット)にもVチューバー教員としてとりあげられ、各種の広報活動へと繋げていった事は、多様なブランディング戦略としても評価できる。【研究課題】大学ブランド商品や農業ブランド商品の開発など具体的な成果が得られており、本事業のタイプA、社会展開型の目標を概ね満たしている。今後は、各研究成果を国際誌等へ発表していくことも重要である。</p> <p>(外部評価)外部評価は、総合評価、戦略評価と研究課題について研究の進捗状況、研究成果の経済性・普及性・波及性・発展可能性、研究成果の優秀性、総合評価および各研究課題毎の項目について評価を受け、それぞれ「非常に高い成果」、「高い成果」、「やや高い成果」、「やや低い成果」、「低い成果」(いずれも5段階評価の4(高い成果)に相当)の評価と以下に示す貴重な意見を頂いた。【総合評価】5年事業が3年に短縮となった厳しい状況の中で、学長を中心に教育開発、研究推進、地域(社会)貢献に向けた、本事業の目標や進捗状況、研究活動の情報をHPサイトや広報用パンフ等で積極的な取り組みをされた。また、総合大学として、アニメーション文化学部にて本事業関連のロゴやキャラクターを作成し、広く情報発信したことも重要であった。この間、地域のブランド力強化に向け、資源環境型、環境保全型農業の取り組みや大学オリジナルブランド商品の開発や製品強化に取り組まれたことは高く評価できる。【戦略評価】ブランディング戦略として、学生獲得・就職戦略、地域へのPR戦略、大学のイメージ戦略をあげられている。これらは、相互に強い関連性を持つ重要な取り組みであり、着実に進められていると評価できる。また、各種メディアでの積極的な広報発信ができており、全国の農業高校関係者へのアピールも行い、対外的にこれ以上ない宣伝ができているといえる。さらに大学のもつ植物クリニックセンターを活用し、定期的に植物保護シンポジウムを開催することで各関係者との情報交換をしている点など大学の魅力発信している点は高く評価できる。【研究課題】いずれの課題も戦略の重要な構成要素であり、各個別課題の成果が期待できる。同時に各課題には相互に連携をすれば一層の進展が期待できるものもありそうである。引き続き、特産物開発(ブランド商品等)、機能性(健康増進、植物保護、発酵商品)、ブランド品種育成、鳥獣害防止などがキーワードになりそうである。今後一層の進展と成果を望みたい。</p>
<p>⑤令和元年度の補助金の使用状況</p>	<p>研究:研究関連消耗品(試薬、種子等) 雑器具(アクアトランスフェノスル、加圧ポンプ等)          広報:TVCM、ホームページ更新、チラシ・ポスター、3Dキャラクター制作          その他:シンポジウム、商標登録等</p>